

実践的体験による地域社会との連携

人間文化学科 大平聡、高橋英博、志村文隆、越門勝彦、土屋純

人間文化学科では、5つの実践的教育を実施した。どれも地域社会に出向き、調査、体験を通して実践的な教育体験を行っている。

- 報告1 小学校資料の整理作業について
- 報告2 仙台市における「娯楽」の商品化
- 報告3 宮城県における伝統方言の現在
- 報告4 仙台市における哲学カフェの試み
- 報告5 道の駅を舞台としたフィールドワークの実践

人間文化学科は、専攻領域が多く、それぞれのゼミ単位での活動が中心である。それぞれの分野の独自性に基づき行われているが、地域の文化や歴史、経済や社会について分野を横断して取り組むことも可能である。今後は、横断的な取り組みを促進していき、総合的な体験学習へと進化していければと考える。

報告1 小学校資料の整理作業について

大平聡

1) 背景・目的

学校日誌という各小学校で残されている歴史資料を収集し、生きた歴史を読み取っていくことを目的としている。

2) 実施内容

①2010年5月13日・14日

気仙沼市立月立小学校

②2010年6月23日・24日

気仙沼市立大島小学校

①気仙沼市立月立小学校での資料整理作業

月立小学校は、全校生徒30名弱の小規模校で、今年2月に大平が資料調査を実施した学校である。旧木造校舎の近くに新校舎が建設され、旧校舎から運び込まれた資料類が書類倉庫に段ボールに入れられたまま保管されていた。2月の調査では、その中から調査対象となる日誌を選んで撮影調査を行ったが、この時、資料の整理を申し出たところ、協力要請があり、今回の整理作業の実施となった。

整理作業には4名の学生、浅利知美・吉村彩佳(4年生)、佐々木優実・水戸裕希(3年

生)が参加した。水戸を除く3名の学生は、2月に気仙沼市立津谷小学校で実施した資料整理作業に参加した経験があり、経験を生かして手際よく作業を進めてくれた。

作業は、まず、書類倉庫から資料の入った段ボール箱30箱を、作業場所に宛てられた会議室に運ぶことから始めた。搬出終了後、箱の内容を大雑把に分類し、4名の学生に割り当て、箱ごとの目録を作成する作業に移った。初日の作業は全体の7割程度の目録を作成して終了した。

初日の活動の一つとして、昼休みを利用し、大平が持参したリコーダーを児童に見せ、小演奏会を開いた。児童は、はじめて見るコントラバスリコーダーなどに興味を持ち、楽器に触れたがったので、学生に付添を指示し、児童に自由に楽器に触れさせ、交流を持つことができた。また、3時の休憩時に児童が下校を始めたので、校庭に出て、下校前に校庭で遊ぶ児童と交流する時間を持った。その様子を教頭先生が撮影し、帰り際に、ミニアルバムに整理して全員にプレゼントして下さった。児童からは感想文も贈られた。

2日目は、残りの作業を進めた。大平は、吉村とともに、気仙沼市立松岩小学校を訪問し、前回の調査で撮影できなかった資料の追加撮影を行い、終業後、月立小学校に合流した。

作業は順調に進行し、午前中に目録作成を終えることができた。作成した目録はプリントアウトし、各箱に貼付して内容がすぐ分かるようにした。最後に、書類の重要度を判断してつけた箱の番号に従い、箱を整理棚に収めてすべての作業を終了し、資料の保存を校長先生にお願いして辞去した。

学校側は、資料整理だけでなく、児童との交流を持ったことを非常に喜んでくれた。作業をしている部屋の窓を外からたたき、四つ葉のクローバーを学生に手渡してくれる児童に接し、学生も、自分たちの作業の様子を見

童が見て関心を抱いていることを自覚し、積極的に児童と接する姿勢を示した。

なお、初日の作業状況は河北新報気仙沼総局の取材を受け、5月15日付朝刊で作業風景が写真付きで紹介された。また、5月28日付の『三陸リアスの風』紙では、1面で大きく紹介された。



資料を取り出している様子



資料整理の様子

②気仙沼市立大島小学校での資料整理作業

大島小学校は、離島の学校であるため、前日から気仙沼市に入った。時間的に余裕があったため、小原木小学校・白山小学校・松岩小学校に、資料整理の成果を届けた。学生も同行した。翌日、第一便の船で大島に入った。

大島小学校では、日誌と奉安殿関係の文書綴り、学校一覧の綴りの目録を作成し、日誌の撮影を行った。参加学生は、前回の作業経験者の1名を除いた3名で、作業内容は熟知しており、分担して作業に当たった。2名が目録作成にあたり、1名が写真撮影を行った。作業は順調に進み、午後1時には予定の作業を終えることができた。この学校は児童数が

多かったこともあり、児童との交流を持つことはできなかった。

時間的余裕があったため、まだ調査を実施していなかった気仙沼市立大谷小学校を訪問し、日誌調査の実施を依頼したところ、河北新報及び『三陸リアスの風』で報道されたことが功を奏し、調査協力の回答を得ることができた。

3) 結果及び考察

二回の作業・調査を体験した学生は、資料の扱いの基本を身につけ、目録作成作業を円滑に行えるようになった。学校長への挨拶も、臆せず行えるようになり、学校側から好印象を得られている。

参加した学生は、NPO法人宮城歴史資料保全ネットの資料整理作業にも積極的に参加している。また、学生の1人は、調査に参加したことを契機に、調査で収集した資料をもとに卒業研究を行うことを決意している。学生が、この作業が歴史資料の発掘、保全に役立つことを理解し、積極的に取り組んでいる点に大きな成果を感じている。

報告2 仙台市における「娯楽」の商品化

高橋英博

1) 背景・目的

仙台市の街中において、商品化された「娯楽」の概要とその立地形態、また、若者によるその利用状況とその特徴などについて明らかにする。

2) 実施内容

人間文化学科の4年生のカリキュラム「課題研究」のなかで、社会学ゼミの12名による共同プロジェクトとして企画・準備・調査・集計・分析・考察を行った。それを、『卒業論文集——2010年度「社会」分野』第13集として刊行した。

3) 結果

報告書（『卒業論文集—2010年度「社会」分野』第13集）の目次は以下のとおりである。

序章	
1	都市機能のなかの「娯楽」
2	商品化された「娯楽」とその広がり
3	本研究の課題と方法
第1章	娯楽ビジネスとその特徴
1	カラオケ
2	ゲームセンター
3	映画館
4	パチンコ、マーじゃん、ビリヤード、ダーツ
第2章	商業施設への集客機能としての「娯楽」
1	まちなかの大型店と「娯楽」
2	郊外大型店と「娯楽」
3	マチナカとアーケードのなかの「娯楽」
第3章	スポーツと「娯楽」
1	「娯楽」の場としての東北楽天ゴールデンイーグルス
2	「娯楽」の場としてのベガルタ
3	「娯楽」の場としてのスポーツカフェ
4	全体のまとめと考察
第4章	文化・教養と「娯楽」
1	ライブハウス
2	コンサートホール
3	その他のイベント
第5章	「飲食」と「娯楽」
1	「食」とアーケード
2	「食」と仙台駅中
3	「飲食」と国分町
4	まとめ
第6章	「娯楽」を発信するメディア
1	フリーペーパーとその役割
2	ローカル番組と娯楽
3	宮城県のイメージとキャラクター
終章	

報告3 宮城県における伝統方言の現在

志村文隆

1) 背景・目的

現在、各地の伝統方言衰退の現象は、全国的な規模で多くの報告で示されている。これは東北方言でも例外ではなく、特に都市部の仙台市においては、共通語化現象の実態が顕著である。一方、宮城県内では、石巻・気仙沼を除く沿岸部などでは、1960年～80年に実施された国立国語研究所実施の方言の全国調査以来、伝統的な方言の実態が把握されておらず、特に離島の詳細な調査はほとんど行われていない。

これまで報告者のゼミでは、塩竈市野々島、石巻市網地島にて方言の実態調査を実施し、島民の方言使用の現状を明らかにしてきた。本研究では塩竈市桂島において、方言文法調査を実施する。特に島内での住民のコミュニケーションと待遇表現使用との関係に注目しながら、そこに現れる伝統方言の残存と消滅の特徴を考察する。住民への聞き取り調査という実践的な体験を通して、学生に学問と社会との接点を学ばせるとともに、研究成果を地域住民へ提供、還元することを目的とする。

2) 実施内容：

年度末（2011年3月）の臨地調査実施に向けて、授業内で学生が発表を重ねてきた。先行研究の読解および言語地図等を利用した語形・表現の収集を経て、調査票が完成した。調査依頼先へのインフォーマント依頼の手続き中である（2月18日現在）。

3) 結果および考察：

調査票の完成によって、予想される語形、表現をまとめた。宮城県沿岸部特有の表現や、待遇表現における方言と共通語の使い分けの特徴を把握した。特に離島特有のコミュニケーションの実態と待遇表現との関係特性を予測検討した。調査実施にともない、これらの実態が明らかになると考えられる。

4) 参考文献、資料等（抜粋）：

- ①加藤正信「全国方言の敬語概観」(『敬語講座6 現代の敬語』明治書院) 1973
- ②金田一春彦「島の言語」(『人類科学』13) 1961
- ③国立国語研究所編『方言文法全国地図』1～6、大蔵省印刷局(1～4集)、財務省印刷局(5集)、国立印刷局(6集)、1989-2006
- ④柴田武「島とそのことば」(『言語生活』368) 1982

報告4 仙台市における哲学カフェの試み

越門勝彦

1) 背景・目的

哲学カフェとは

哲学カフェとは、コミュニケーションそのものを目的として集まった市民が自由に対話を交わし合う一つの間である。日常生活や医療、教育、科学、芸術などさまざまな分野から一つのテーマを取り上げ、そのテーマについて各人が意見を出し合いながら、参加者全員で考えていく。ただし、哲学や哲学史の専門的な知識は全く前提としない。専門家の知見や既存の概念にとらわれずに自分たち自身で考えるというその姿勢を「哲学」と表しているにすぎない。進行役が議論の進行をサポートする。

本場フランスではあらゆる場所で頻繁に行われているが、日本ではまだ特定の地域に限定されている。その中では、大阪大学文学部倫理学科主催の哲学カフェがよく知られている。仙台でも、東北大学大学院生や東北文化学園大教員を主催者とする活動が行われている。

2) 実施内容

企画のコア・メンバーは、宮城県庁長寿社会政策課の渡辺達美氏、同県庁教育企画室の鈴木智子氏と筆者である。企画の実現へ向けて、三回にわたって両氏と話し合いの機会を設けた。そのうち一回は、本学教員の大橋智

樹氏と西浦和樹氏にも参加してもらい、取り上げるテーマや対話の進行、広報のあり方などについての意見を述べてもらった。

3) 結果及び考察

その過程で議題に上った論点は以下の通り。

・カフェの基本方針は？

哲学に興味を持ち問題関心を共有している人どうしが対話をし、様々な意見を聞くことで各自の視野が広がればそれで十分と考える。また、それで満足してくれる人の参加を期待する。

・議論をするのか、それとも対話をするのか？

「傾聴」を重視する対話を目指す。特定の学説や立場の正当性を論証することが会の目的ではない。参加者各人にもその姿勢を求める。

・ウェイトを置くのは、抽象度の高い議論か、それとも参加者の具体の経験か？

参加者の具体的経験に基づく見解を重視する。ただし、ある程度意見が出尽くしたところで、全体のまとめをする際に抽象的な議論になるのはいたしかたないと考える。

・重視するのは、プロセス（問答法の練習とか）か、それとも中身か？

中身を重視する。対話の形式は対話そのものの充実度(=中身?)に大きく影響するので、形式をまったく無視するというわけではない。

・カフェ・マスター（進行役）は、プロセスにどの程度介入するのか？

いちばん判断に迷う点。まず、特定の図式へと誘導するつもりはない。対話が行き詰ったり、散漫になり始めたと感じた場面だけピンポイントで介入する。懸念されるのは、それだけで議論が円滑に進行するだろうか、ということ。議論を進展させようと介入の度合いを高めればそれだけ進行役の考え方を押し付けることになり、結局、誘導と変わらなくなってしまう。

・参加者全員で「答えのようなもの」を共有するのか、参加者それぞれに委ねるのか？

答えの共有は、不可能だとは言いきれないけれども、目標として設定する性質のものではないと考える。参加者各自にゆだねる。

・どのようなテーマを取り上げるのか？

生命倫理に関連するテーマ。是非をめぐって意見が分かれやすいものを優先的に選ぶ。具体的には、安楽死、出生前診断と人工妊娠中絶、臓器移植など。

4月下旬に第一回を実施する予定。場所は青葉通沿いの喫茶店「わでい・はるふあ」。大学院生に参加を呼びかけてみる。

報告5 道の駅を舞台としたフィールドワークの実践

土屋純

1) 背景・目的

道の駅による地域活性化について、現場の人々から聞き取りを実施することによって理解することも目的とする。

2) 実施内容

2010年7月3日(土):あ・ら・伊達な道の駅での講演と調査

事前学習

現代社会演習Ⅰ・Ⅱ(b)の受講者(2年生)32名が、①道の駅の経緯、②全国的な道の駅の状況、③いくつかの道の駅についての経営状況、の3つについて分担して資料を収集し、レポートとしてまとめた。道の駅がどうして全国的に普及していったのか、道の駅が地域の中でどのような役割を果たしているのかについて、まとめるとともに、参加者が情報を交換してお互いに理解を深めていった。

現地での講演

7月3日(土)の午前中に1時間ほど、あ・ら・伊達な道の駅の駅長である酒井栄一氏による講演を頂いた。道の駅の設立経緯や、現在の経営状況について資料を基に詳しく説明頂いた。内容は以下の通りである。

岩出山町立池月小学校が閉校され、その跡地利用をめぐって地域では話し合いが行われ

た。スポーツ施設など地域交流施設が検討されていたが、他の地域では道の駅が盛況であることを聞きつけ、視察するとともに、計画を練ることとなった。特に、農産物直売所を併設して、地域の農産物を積極的に販売していくこととなった。

設立後の道の駅は当初赤字を計上したが、直売所に協力する農家が増加し、旬の野菜を中心にさまざまな農産物が品揃えされたことによって、売上を伸ばしていった。協力農家は高齢者が中心であるが、スーパーなどに品揃えしていない多品種の農産物が出荷されたことにより、仙台市を中心としてリピーターが増えていった。そして農家にとっても収入増加となり、積極的に参加していくこととなった。

また、姉妹都市との連携や地域住民とのイベント開催によって魅力が増すこととなり、東北地方で一番の売上を誇る道の駅となった。



講演の様子

現地での調査

講演が終了し、道の駅で昼食を終えた後、2時間ほどの時間を使い、道の駅利用者に対するアンケート調査を実施した。その内容は、①出身地、②利用目的、③利用金額、④来訪回数、などである。のべ78組の利用者に対してアンケートすることができた。

その概要は、①土曜日であったので近郊の人々、特に仙台市民が多かったこと、②農産

物直売所に魅力を感じている人が多く、中には5回以上のリピーターが存在したこと、③利用委金額は1000～3000円であり、岩出山地区以外の人々のマネーが地域に流入していること、などを確認した。



アンケート調査の様子

ポスター作成と展示

①事前学習の内容、②講演で聞き取った内容、③アンケート調査で収集したデータ、を基として4枚のポスターを作成した。作成したポスターは、8月上旬から9月上旬にかけて、あ・ら・伊達な道の駅の交流スペースに展示した。こうすることによって、道の駅に対してささやかなお返しが出来たと考える。



作成したポスターの例

3) 結果及び考察

上記のように、体験学習を通して貴重な体験が出来たと考える。成果としては、①実際に現場で話を聞き、調査を実施することによって、現場に対して実感のある理解が出来たこと、②事前調査、講演やアンケート調査をまとめ、現場で展示することによって、協力頂いた道の駅に対してささやかな貢献が出来たこと、を挙げることができる。課題としては、①主に担当の土屋が計画作成したので、受け身で参加する学生も多かったこと、②ポスターのまとめ方に対する指導が不十分だったので、一般の人々にわかりやすい者とはならなかったこと、を挙げることができる。